

令和3年度の研究(または活動)内容

本年は、計2回のリモート会議(6/29, 10/20)を行ったほか、以下の研究活動等を主に実施した。

3-1 調査研究活動

(1) 福島県伊達市・T蚕種製造所の実測調査(担当:大沼+研究室院生・学生)

阿武隈川右岸、伊達市伏黒で営まれている蚕種製造所の実測調査を行った。国内4件、東北では本件1件のみに淘汰された現在、文化財級の極めて貴重な遺構といえる。実測とリモート調査を併行し、生業と空間の関係性をひもとくことができた。一連の調査にあたっては、研究室院生・学生(林・山地)が主体的に参画したことから、教育的効果も大きかった。

(2) 刈田郡七ヶ宿町・S白炭工房の実測調査(担当:大沼+研究室院生)

福島県伊達地方に出荷していた歴史もある七ヶ宿の白炭は、黒炭優勢の東北では希少である。故・佐藤石太郎名人が保持していた炭焼き技術を習得し、新たな価値を付与して生産販売している。最近では工房において「くらしを教授する」業態も模索しており、単にものを生産するのではなく、コトとともに提供する新たな生業・生業景の兆しをみせる。同じく院生(林)が貢献した。

(3) 石巻市北境・複合農家H家の実測調査(担当:大沼+研究室院生)

稲作農家、畜産業、高齢者就労施設を多世代で複合経営する農家の実測調査を行った。農業そのものを効率化、集約化、多角化する展開ではなく、培ってきた業態を持続させながら、地域課題の解決を兼ねて福祉方面に進出した点が注目される。いわゆる痴呆状態になっても手が仕事を覚えていることから協働できる点も重要である。家屋はスレート屋根。同じく院生(林・堀)が貢献した。

(4) 鳥海山・飛島ジオパーク、NPO 法人パートナーシップオフィスへの参画・支援(担当:岸本+研究室学生)

2021年度に着任した岸本が前任地において主導した活動である。地球史的な学びの景勝地を活かしながら、そこに息づく生業と新たな価値創造を実践している。人口減少問題を乗り越え多彩な活動で交流人口を生み続ける離島・飛島は度々メディアにも登場している。岸本研学生(千尋)は100日を超えるフィールドワーク後、飛島振興を担う合同会社とびしまに就職するなど新たな結びつきが生まれている。

(5) 仙台近郊の竹材調査:名取市愛島近辺の「竹畑」「竹林」(担当:岸本+研究室学生)

名取市愛島近辺において育成されている竹林に着目した。生活利用するために積極的に手を入れて質を維持している竹林を「竹畑(たけばたけ)」、これに準ずる環境保全的な竹林を「竹林(たけばやし)」として維持しており、令和の時代にあっても呼称とともに維持されている環境保全のありようはSDGs的にも含蓄が深い。岸本研の学生(藤野)が主体的献身的にこれにあたり、地域資源を活用した観光まちづくりを目的とする公民館講座へ参加、助言を行うなどの地域活動を実施している。

(6) 八郎潟・八郎湖地域資源発掘チーム(担当:秋美大菅原香織+研究室学生)

近代農村改革の代名詞・八郎潟は、むしろかつての潟湖のエコロジカルな意味が再評価されつつある。今年度は計 5 回の地域資源発掘ワークショップを実施、活動内容をマップ&カタログの形でまとめると同時に、秋田県北・三種町の漁師取材では YouTube での動画発信も開始した。次年度は、地域資源ツアーの企画・実施・検証を予定している。

(7) 地域未来学「雄勝現場実習」への協力(2022.3.12, 担当:阿部・菅原・大沼)

本学地域連携センターが主導している公開講座で、最終回は現場実習とし、当研究所メンバーも中核的に関わった。地域の未来の姿を創造・構築するため地域の生業等を学ぶこと、東日本大震災等災害の経験にもとづく伝承や災害からの復興と再生について学ぶこと、SDGs にもとづいた環境課題解決や地域の共生・共存などについて学ぶことを目的としている。雄勝の生業景の現場は、世代継承時の課題に直面しており、引き続き参画していくこととしている。

3-2 デザイン協力活動

(8) 宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク「みんなでまもった美術館」発行

本活動は、研究所としての直接活動ではないが、西大立目、高橋、田澤、大沼が中核メンバーであること、宮城県内外の美術工芸ネットワークとの関係が深いことからここに記す。2020 年 11 月に現地存続が叶ったのち、濃密な活動の日々を記録としてまとめ、2021 年 7 月に発行することができた。

(9) 施設整備へのデザイン協力:工藝藍學舎(加美郡加美町中新田南町, 担当:大沼・阿部・学生ら)

上記(8)をきっかけに知遇を得た事例である。加美町の工藝藍學舎は、東北一円の若手工芸作家を育てながら、自身も染織家として活躍する笠原博司氏が主宰するアトリエ・ギャラリーである。令和 3 年度、同町の陶芸博物館だった施設が同氏に払い下げられ、宮城が誇る天然スレート材を用いることで素材感を大切にすアトリエの意匠的向上をめざすこととなった。この材料は、2019 年 1 月に東北大学片平学生ホールの解体に際して採取したものである(2019 年度報告・KPI 欄所収)。学生の協力によって「洗い」を済ませ、現地にて葺き上げたもので、担当は東京駅丸ノ内駅舎を手がけた国選定保存技術「石盤葺」保持者の佐々木信平氏である(実施工業務は藍學舎と信玄石盤工房との直接契約であり、本学は調査設計・監理協力を担当/設計監理は加藤一成建築設計事務所が担当)。また、本屋塔屋の頂部に取り付けられたフィニアルは、施主のスケッチをもとに筆者が 3 次元設計を行い、金属工場・萩原陵氏が組み立てたものである。これも院生・学生(林・黒井ら)が協力した。



左より写真 1~4 新工藝蘭學舎内観, 再生後外観, スレート施工風景, 萩原氏協力のフィニアル

(10) 登米市南方町・大嶽山興福寺書院の実測調査と利活用提案(担当:大沼+研究室学生)

登米市指定文化財を2件有し、書院建築は国登録有形文化財とされる名刹で、地域の生業景の基盤的存在として、今回は建物実測と「ブックロッジ」なる多世代の学びの場を提案した。現代の寺子屋は如何に可能となるか、過去の遺産はどのように活用できるのか、価値を損ねない再生デザイン手法などの検討を重ねた。報告後、丁寧な礼状を頂き安堵している。同じく学生(高橋・林)が貢献した。

3-3 その他

(1) 丸森町の小学校廃校舎を活かした拠点施設計画への協力準備

丸森町では2021年度をもって、8地区に分かれていた小学校が2校に統合される。そこで、廃校舎となる施設空間の新たな地域的利活用方策に関する相談が寄せられ、視察調査を実施した。次年度にかけて継続検討課題とする予定である。

(2) 令和2年度、仙台市太白区から地域連携センターに寄せられた相談案件に、長町駅前広場において地元商店街等が用いるオリジナル屋台を造りたい、との企画があった。コロナ禍でイベント開催が限定的で、筆者の時間的制約もあり必ずしも十分に貢献できなかったため、継続課題としたい。